



600字物語021

つぶあんぱん



エリー ELYE

目次

600 字物語 021 つぶあんぱん	1
------------------------------	---

600 字物語 021 つぶあんぱん

わたしはできたてつぶあんぱん。

酒種仕立ての柔らかい生地に、つやつやのあんこを包んで、ちよこんとサクラの塩漬
けを飾ってあるの。

昔は、斬新な試みだって大ウケで、飛ぶように売れたそう。

だけど今は古臭いものの代表のように言われてて、売れ残る日が多いんだって。

職人さんたちの話を聞いたわたしは胸がチクンと痛んだ。

わたし食べられずに捨てられちゃうの？

そんなの悲しい。いやだ。

あ、お店が開く。

ロールパンも、カレーパンも、メロンパンも売れたのに、つぶあんはまだ一つも売れ
てない。最前列のわたしは緊張して待つ。

わたしはココよ。ここで待っているわ。

無情にも時は過ぎて、太陽が西の空に沈みかけていた。片付け始めた職人さんは夕飯
の話をしている。もうダメなのね。

その時、カランコロンとベルが鳴る。

「あああった。仕事の後はこれだよね！」

誰なの？ 誰のことなの？

トングがつかんだのはわたし。

初めて見た夕焼けに染まる公園はとても心地よい。彼は紙袋からわたしを出してか
じる。

痛い。食べられるのって辛いよね。

でも捨てられるよりいい。わたしは、あなたになるのね。血になり、肉になり生きる。

よろしく新しいわたし。

600字物語021つぶあんぱん

著 エリー ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
